

## ②企業大学訪問

私は8月5日、6日に開催された東大見学会に参加した。

1日目、午前中のディレクトフォースが終わり企業大学訪問の訪問先である動物検疫所羽田空港支所に向かった。私は自宅近くに動物園があるということもあり、小さい頃から動物やその飼育について興味関心があった。そこで獣医という職業を知り、最初は動物病院や動物園などにいる獣医しか知らなかったが、獣医はそのような臨床獣医師だけではなく、畜産業や公衆衛生など様々な場面で活躍していることがわかった。今回の企業大学訪問では、日本から輸出、輸入される動物や畜産物によって口蹄疫などの動物の伝染病が日本に侵入、あるいは日本から侵出することを防ぎ、日本を守っている動物検疫所羽田空港支所に訪問させて頂くことができた。

東京駅から電車に乗ろうとすると、たくさんの人が行き交っており、自分が乗る電車を見つけるまでに予想以上に時間を費やしてしまった。仙台とは比べものにならない程に人が多くて駅も広く、自分も東京のような大都会で暮らすようになれば、この中で生活しなければならないのだと痛感した。動物検疫所の方との待ち合わせ場所である羽田空港のロビーに到着すると、そこでは様々な言語が飛び交っていた。初めて空港に入った私は衝撃を受け、検疫所の職員はこのような国際的な職場で働いているのだと実感した。

羽田空港では年間約45万回近くの便が離着陸しており、空港内では様々な仕事をしている人がいた。動物検疫所はC I Q（税関、出入国管理、検疫）の検疫（Quarantine）にあたり、主に輸出入される動物やその加工品などの検査の業務にあっている。農林水産省の機関であるため、基本的に勤務形態は日勤で土日が休みである官執勤務時間での勤務である。職員のほとんどが獣医師であり、私は初めて多くの獣医と一緒に仕事をしているのを見た。

検疫所では、実際に検査が行われる場所や、検疫探知犬による手荷物検査を見学することができた。まず、動物を輸出する際の検査では、その動物が海外で伝染病を拡げる恐れのない安全な動物であることを証明するために、種類ごとに決められた期間の係留や検査が行われている。例えば犬の場合、12時間以内の係留と、狂犬病の有無についての検査が行われる。無事に検査が終了すると輸出証明書が相手国へ送付される。

首の後ろには世界で唯一の15桁の数字が記録されたマイクロチップが埋め込まれており、それを読み取ることで個体の識別をすることができる。まだ全ての犬にこのマイクロチップが普及している訳ではないので、安全で確実な個体識別をするためにも、このマイクロチップを普及させていくべきだと思う。次に、輸入された動物の検査では、輸出国から送付される輸出証明書などによって必要な条件を満たしているかなどの確認がされ、種類ごとの期間の係留や様々な検査を経て、合格した場合は輸入が許可され、不合格の場合は返送、処分される。畜産物も同様である。最近、エボラ出血熱が流行したが、エボラ出血熱やマールブルク病などの人に感染すると致死率の高い感染症を媒介するサル類の輸入は禁止されているが、試験や研究などのために輸入が許可されたサルについては隔離施設などで係留し、検疫検査を行っている。水際対策の強化として、入国者に対する質問や要消毒物の消毒、検疫探知犬による手荷物の検査などが行われている。

検疫探知犬は、動物検疫の対象物の臭いをかぎ分け、発見してくれる。外見では見分けられない手荷物の中の検査対象物を発見し、ハンドラーに伝えることで輸入禁止品等の摘発に高い効果を発揮している。では、どのようにしてハンドラーに発見したことを伝えるのか。私は最初、吠えることで伝えると思った。しかし空港には犬の嫌いな人や宗教上犬とふれ合えない人など様々な人がいる。さらに犬が吠えたりすれば周りの人達が驚いてしまう。だから、検疫探知犬は検査対象物を発見すると、その場に座ることで発見したことをハンドラーに伝えるのだ。乗客に恐怖を与えないためにも日本では検疫探知犬にビーグル犬が使われている。

輸出入の検査は、1日約3～4件程度だが、多いときには10件以上もの検査をする日もあるそうだ。どのような時に検査が多いのか聞いてみたところ、3～4月の引っ越しシーズン、ゴールデンウィークや夏休みなどの

旅行シーズン、ドッグショーが開催される場合などだそうだ。

次に検疫所の方々に質問に答えて頂いた。

若い獣医師の方からベテランの獣医師の方まで、色々な話を聞くことができた。まず最初に、動物検疫所の仕事のやりがいについて伺った。動物検疫所では、臨床医のように、動物を診察することで飼い主に喜んでもらえるといった直接的なやりがいではなく、自分の持つ専門性を使って日本を守っているということがやりがいだとおっしゃっていました。検査した畜産物を自分の家族に食べさせられるかということなどを常に考え、責任感を持って仕事に臨んでいるそうだ。しかし、お客様に法律で日本に持って行ってはいけない物があると伝えると、個人的な文句を言われるなど、日本を守るためにしていることなのに大変な思いをすることももあるそうだ。

また、動物検疫所羽田空港支所というチームで働いているため、家畜防疫官やハンドラー、検疫探知犬など、それぞれにしかできない仕事があり、全員そろって初めて動物検疫所の業務ができるそうだ。電話の対応などでは、新人獣医師であるということに関わらず、動物検疫所や農林水産省といった組織の一員として見られるのだ。そのため、新人は仕組みや基礎、手順を覚え、自分の無知によってお客様や国に迷惑をかけないようにしなければならないのだそうだ。

私は、左利きなのだが、獣医として働く上で不都合なことはあるのか伺った。すると幸いにも左利きの獣医師の方がいらっしゃり、質問に答えて下さった。左利きであることで不都合な事は少ないが、ハサミや大学での牧場実習で使うカマが左手だと使えなかったり、大学の教授が右利きなので教えてもらう時にすべて反対だったり、「右社会」における苦労は多いそうだ。そのため、右手でペンや箸などを使う練習をすると良いとアドバイスをもらった。私も今まで様々な場面で左利きであることをコンプレックスに感じることもあったが、これからは箸を右手で持つなど、右手も少しずつ使えるようにしていくことで、右手でしかできないことに対応できるようになり、さらに左利きであることも生かしていきたい。

学生のうちに、獣医に関する漫画や図鑑を読んで知識をつけたり、獣医ということに囚われず、自分の興味のあることを幅広く勉強したりすることが大切とのことだ。獣医師と無関係だと思われる知識も、思わぬ場面で役に立つかも知れないのだ。また、グローバル化が進んでいる今の時代、英語はもちろんのこと、もう一言語学んでおくことが必要とされてくる。

獣医になるためには獣医学科のある大学に進学しなければならない。これはOBによる懇談会でも言われたことだが、大学選びの際は大学ではなく学部を見て判断する必要がある。その学部で自分が何を学びたいのか、本当に自分が興味のある学問を学べるのかを吟味しなければならない。また、獣医学部に関しては、例えば東京農工大学では犬や猫に強かったり、岩手大学では大型動物に強かったりと、地方ごとの特色に大きな違いがある。

そのため、できるだけ多くの大学のオープンキャンパスに行き、自分に最適な大学を見つけることが大事だそうだ。今回の企業訪問を通して、様々なことを体感することができた。動物検疫所で働いていた方々は皆、自信とやる気に満ち溢れているように見え、自分の好きなことを仕事とするのは羨ましいと思った。そして、これまで以上に獣医になりたいという思いが募った。今、自分がやるべきことを一生懸命に頑張り、絶対に獣医になりたいと思う。

最後に、今回の企業訪問を快く引き受けてくださり、私達のために貴重な時間を割いて大変ためになるお話をしていただいた動物検疫所羽田空港支所の皆さま、本当にありがとうございました。

